

古文を読むべき理由について

校長 浅田 徹

新学習指導要領において、高校の「国語」は大きく変化した。必修科目「国語総合」が「現代の国語」「言語文化」の2科目に分けられ、選択科目が「論理国語」「文学国語」「古典探究」「国語表現」という4科目に再編された。その際、もとの選択科目の「現代文」が「論理国語」「文学国語」に峻別されたことは少なからぬ波紋を生じさせた。日本文学系の学会はこぞって、こうした措置に対する疑問をホームページ等で表明し、日本学術会議でもそれを承けての提言が行われている（2020年6月30日付の「言語・文学委員会」による「高校国語教育の改善に向けて」）。

しかし、それと同時に導入された必修科目「言語文化」と選択科目「古典探究」については、それほど問題にされなかった。大学入試の共通テストでも、少なくとも現在のところ古文・漢文は以前とさほど変わらぬ形で出題されており、高校で「古典探究」を履修する層も、当面は一定の割合で維持されるものと見込まれよう。

ただし、高校教育から古文・漢文を除くべきだとか、少なくとも必修から外すべきだという意見も根強い。例えば『高校に古典は本当に必要なのか』（2021年、文学通信）は高校生が主催し、研究者を巻き込んだシンポジウムを基として刊行された本で、中にはかなり痛烈な古文批判が含まれている。

高校生が古文を勉強すべき理由は何なのだろうか。『高校に古典は本当に必要なのか』には、古文を擁護する立場の日本古典文学研究者たちも何人か参加していて、めいめいの見解を披瀝しているが、そこで挙げられている理由は人により様々であるようだ（詳しくは同書に即いて見られたい）。私も古典文学研究者だが、私の思うところも、彼らと同じではない。

まず、それに先立って言いたいのは、「古典は『よいもの』だから勉強すべきだ」「古典は日本人のルーツだから勉強すべきだ」という議論には、同調できないということである。確かに古典として遺っている作品は「良い」ものが多いと私は思うけれども、そう思うかどうかは読者である高校生が判断すべきことではないだろうか。さらに、古典は「善い」ものだと教えるのは一層問題だ。『平家物語』の「木曾最期」で、木曾義仲が首を取られたことを知った乳母子の今井兼平が、壮絶な自害を遂げる場面は、多くの教科書に採られてきたが、そのような命の捨て方を称揚してよいものだろうか。あるいは、女性に対して、「夫にはよく尽くし、自分の意見はあまり言うてはいけない」と諭す古典作品はたくさんあるのだが、それらを「善いもの」として教えることができるだろうか。生徒たちから、古典に対する批判的な見方を奪うのは適切ではない。

また、古典を「国民としてのアイデンティティ」形成の基盤と考えて尊重しようとする見解があることは承知しているが、例えば平安文学は基本的に貴族層の文学でしかない。そこに優れた遺産が多々含まれていることは事実としても、それが「国民のアイデンティティ」に成り得るのだろうか。一例を挙げると、平安時代和歌は、「縁語」「折句」で特徴付けられることからわかるように、ひらがなの発明を前提とするものだが、そのことは文字が読めない層を和歌から排除する結果となったのではないかと、私は以前論じたことがある（浅田「声から紙へ—和歌の宿る場所—」、『和歌が書かれるとき』2005年、岩波書店）。

そもそも「国民のアイデンティティ」なるものが、プラスの性質を持つものかどうかともわからない。

頬骨が出て、唇が厚くて、眼が三角で、名人三五郎の彫った根付の様な顔をして、／魂をぬかれた様にぽかんと／自分を知らない、こせこせした／命のやすい／見栄坊な／小さく固まつて、納まり返った／猿の様な、狐の様な、ももんがあの様な、だぼはぜの様な、麦魚（めだか）の様な、鬼瓦の様な、茶碗のかけらの様な日本人（高村光太郎「根付の国」）

というような自虐的な規定こそ、痛切な「アイデンティティ」であるかもしれないだろう。少なくとも明治～昭和初期の小説家が見据えていた「国民性」とはそのようなものだった。逃れようとしても逃れられない絆（古文では「絆」はマイナスイメージの語である）としての同一性こそ、共同体が自らのために可視化し、対象化しなくてはならないはずではないか。

私が高校生に古文を学んでほしい理由はむしろ、「日本」は変わってきたし、今後も否応なく変わっていく」ということを実感できることにある。例えば、一夫多妻制という、今では考えがたい婚姻制度の下にあった時代の女性たちに対して、現代の夫婦間の愛情の感覚がそのまま適用できるはずはない。あるいは、「家」の重圧が極めて強かった時代の男子の心情を描いた小説を、今の若い世代が共感を持って読むことは難しいだろう。しかし、そうした時代の文学を知ることによって、日本はいろいろな経緯をくぐって現在の姿に至り着いていることが心情として理解できる。近代以前の文学は、現代の倫理観からするとむしろ有害に思える場合もあるだろうが、だから教えないというのは誤りである。それでは、現代が無条件に正しいことになってしまうし、そのように「蓋をされた」歴史はいかがわしくはないだろうか。

さて、高校生が「古文嫌い」になる最大の理由は、古典文法を覚えさせられることだとよく言われる。実は新学習指導要領の「解説」は、「言語文化」という科目の指導において「文語のきまり、訓読のきまりについては、詳細なことにまで及ぶことなく、読むことの指導に即して扱うとする考え方は従前と同様である。したがって、文語のきまりなどを指導するために、例えば、文語文法のみ学習の時間を長期にわたって設けるようなことは望ましくない」と、古典文法に深入りしないようにわざわざ注意している。私もある高校の国語科で10年ほど非常勤講師をさせて頂いたことがあるが、文法の時間では生徒たちがつらそうだったことをよく覚えている（授業が下手であったからには違いないが）。

しかし、古典文法はぜひ高校生によく学習してほしいと考える。現代語の文法は中学で習うはずだが、それが身につく生徒は稀ではなかろうか。現代語は、文法を知らなくても問題なく読み書きができる。だから覚えないのである。一方、古文は単語ごとに区切って解析する手間を掛けなくては、ちゃんと読解することができない。「日本語には文法がある」と明確に理解できるのは、実は高校で古典文法を学ぶからなのだ。

そして、古典文法を知ることによって、「日本語」は変わってきたし、今後も否応なく変わっていく」ことを初めて理解することができる。古典文法の学習の焦点は助動詞だが、「つ」「ぬ」「たり」「り」と、似たような完了・存続系の助動詞が四つもあり、「む」「べし」「けむ」「らむ」「らし」のような推量系の助動詞も多い。我々が現在しゃべっている日本語は、だいたいいろいろなことが「削ぎ落とされた」言葉なのである。「見た」「山だ」「来るだろう」といった表現は、我々の言語の根幹をなすものだが、長い日本語の歴史の中で見るなら、「たり」「にてあり」「にてあらむ」がそれぞれ崩れて摩耗してしまった、ごく新しい形態でしかない。

また、打ち消しの表現は本来、「知らず」のように助動詞「ず」を接続させて示すものだったが、現代語では「知らない」のように形容詞「無い」が動詞に突然接続してしまう。これは日本語の原則から見ればかなり奇怪なものである（「知ら赤い」とか「知ら安い」というような言い方を想像してみれば、その奇妙さがわかる）。

平安時代の文法も、現代の文法も、日本語が絶えず移り変わっていくある瞬間を切り出したものに過ぎない。奈良時代の人々が、文語文法の規範とされる平安文法を見たら、その奇妙に崩れた形態に驚くだろう。現代日本語もこれからさらに意外な変貌を遂げて、我々からすれば異様なものになっていくし、やがてはそれが「正しい日本語」の位置を得ていくのである。

日本は、極めて恵まれたことに、西暦600年代から現在まで、自言語の作品が豊富に残っている。古典文学は異なった文化・社会に生きた人たちの心情を伝えてくれているし、言語自体の変遷のありさまもよく辿ることができる。古文は伝統文化を讃嘆するための科目ではなく、異文化を理解し、自分を相対化するための科目なのである。